

文脈がすべて

T. D. Minton

はじめに

語学の教科書と参考書は、おそらくそれらが存在するようになって以来、学習者にナンセンスな例文を提供してきたことで批判され続けてきました。西欧諸国でそのような例文として最も引き合いに出されるのが、My postillion has been struck by lightning. 「私の馬車の御者が雷に打たれた」です。これはある「匈英（ハンガリー語—英語）句動詞辞典」に出ていると言われてはいますが、だれかが単なる冗談として作った可能性もあります。この文は、だれが見ても語学教科書の不自然な例文の中で際立った例だと言えます。

あえて明白なことを述べさせていただきますが、この文は文法的に間違っているわけではありません—語学教科書によくある不自然な言語の極端な例であること以外に、その表現を使う「文脈」がだれにも想像できないのです。

今日私が追究したいのは、教科書の例文における、この「文脈」という問題です。日本で出版されている英語教科書について述べたいと思いますが、これを取り上げる理由はそれらが不自然な文を含む唯一の本だからというわけではありません。その理由としては、1) 日本の英語教科書こそは、私が最も熟知した本であり、2) この記事の読者にとって、例えばポーランドで出されたテキストよりも興味を持っていただけに違いない、からです。

「代名詞」を多用する訳文

日本で出版されている英語教科書の「文脈」の欠如に関する最大の問題は、英語をそのまま訳した日本語にも現れています。これらは失笑せざるを得ないほどに不自然です—ごく自然な日本語では省略される「私は」「それを」「あなたに」といった言葉を数多く含んでいるからです。本稿を書くために、書棚から無作為に選んだ教科書を読んできましたが、

以下のような例が見つかりました。

「私の母は私の父よりもゆっくり話す」

「私はあなたに歌を歌ってほしかった」

「それは私に楽しみを与えてくれました。また、それは私を元気にしてくれました」

私は日本語の「母語話者」ではありませんが、これらがとうてい自然な日本語の文でないことは即座にわかります。翻訳の元になった英語の文は、実のところ問題はありませぬ—つまり文脈を考える限り、論理的に自然です。しかし、不自然な日本語の翻訳文は、文法的に正しければ許容されるべきなのでしょうか？ 私はそうは思いません—自然な文を不自然に翻訳したものは、「下手な翻訳」としか言えないでしょう。教科書の執筆者たちは、日本語の不自然な要素を含めざるを得なかったのは、英文の各要素が日本語のどこに「相当」するかの関連付けを生徒がしやすくするためだと言うでしょう。しかし、この説明では「適切な文脈を与えるべきだ」という論を補強することにしかありませんし、そのような悪文を出版することを正当化する理由にもなりません。多くの場合、誤解の危険性がまったくない場合であっても、彼らは依然として不自然な日本語の要素を入れているのです。

「私は本当にこのドレスが気に入っているが、私には少し小さすぎる」

この日本語は何なのでしょう？ たとえ最初の「私は」は使わざるを得ないにしても（それも怪しいものだと思いますが）、2番目の「私には」も使うべきなのでしょう？

あれこれ述べてきましたが、英語話者のためのフランス語の教科書の執筆者たちは Je t'aime を訳す

とき、代名詞がフランス語でどこに置くべきかを生徒に理解させるために、I *you* love と文法的に間違った形をわざわざ示すことはしません。日本の教科書式に「私はあなたを愛しています」と訳すことが必ずしも文法的に間違っているわけではないことはもちろん理解しています。しかし、実際の言葉の使われ方を考えた場合、よくないものはやはりよくないと私は言いたいのです。そのような不自然な訳が掲載された教科書を出すことは、完璧に正しい英語をおかしな日本語に訳すことを生徒に奨励するようなもので、決して好ましくない影響を彼らに与えることとなります。

同様に、フランス語では la plume de ma tante を the pen of my aunt のような奇妙な言葉で訳すこともしません。ついでに言えば、この la plume de ma tante というフレーズもまた荒唐無稽な教科書の表現としてよく取り上げられる例です。フル・センテンスで示すと、この表現にはしばしば est sur le bureau de mon oncle — is on my uncle's desk が続きます。少なくとも is on the desk of my uncle ではありません。しかし、どんなにきちんと訳したとしても、My aunt's pen is on my uncle's desk. はやはりナンセンスな例文です。いったいだれが実際にこんなことを言うのでしょうか？

場面が想定できない英文の例としては、次のような問題文もあります。

「私は彼に後で折り返し電話をするように頼んだ」

「私は彼に後で折り返し電話をするように頼んだ」と言う人が実際にいるものなののでしょうか？ この問いに対する答えは間違いなく、「誰も言わない」でしょう。しかし、この例文は二、三の単語を加えて、「文脈」を作るだけで簡単に解決できます。

I was on my way out when Bob called, so I asked him to *call me back* later. 「ボブが電話をかけてきたとき、外出しようとしていたので、後でかけ直してくれるように頼みました」

こうすれば書き手が提示したかった文法構造を自然な設定で示すことができます。「文脈」を与える

ことで、例文が自然な日本語となり、その結果として生徒も覚えやすくなるというものです。

単独の文での「the+普通名詞」

当然のことながら、教科書には紙幅の制限があり、そのためにすべての例文に十分な「文脈」を与えることができないことは理解しています。しかし、そうは言っても、読者が苦勞せずに「文脈」を推測できることが重要です。例えば Bill fell in love with Mariko at first sight. 「ビルは一目でマリコとの恋に落ちました」という文では、この情報が向けられている人が、すでにビルとマリコがどのような人なのか、どのような時間枠（過去時制を使用する上で重要なことです）での話なのかを、ごく簡単に推測できます。しかし、以下の文はどうでしょうか？

She fell in love with the movie star at first sight. 「彼女はその映画スターを一目見るや恋に落ちた」

これは書き手がこの「文脈」ではまず使われない言葉を使い、無理に「文脈」を作ろうとした典型例です。この場合の不自然な要素とは、the movie star です。この文が読んだり聞いたりする人にとって意味を持つためには、「彼女」がだれなのか、問題の映画スターがだれなのかをわかっていなければなりません。もしその映画スターがだれなのかをすでに明らかであれば、代名詞の he や him を使うべきですし、この文のいくつか前の文で、それが述べられていなかったとすれば、具体的な名前を用いるべきです。いずれにせよ、the movie star 「その映画スター」とすべきではありません。

どんな実際的な見地から見てもこの文は「機能不全」に陥っていると言えるでしょう—それが使われる状況を想像することがほとんどできないからです！それでも何とかあり得そうにないシナリオを想像すると、こんなところになるでしょうか。例えば、私が彼女を医師、歯科医、映画スターに紹介したところ、彼女は一目でそのうちの映画スターと恋に落ちた、というケースはあり得るかもしれません。

教師が生徒にそのようなあり得ない「文脈」の可能性について説明することはできるかと思いますが、そこまですべきだとは思えません。とにかく特別な

説明をしなくても、「文脈」が容易に想像できる例文を提示することの方が確実にずっとよいに決まっています。

ご承知のように、上で示したような不自然な要素を含んだ例文は、日本で出版されている英語教科書ではごく当たり前のことです。以下にいくつかの典型的な文例を示しますが、どの教科書を開いてもほとんどあらゆるページでこのような例を発見することができますでしょう。もし私たちの目標が対象となる言語の自然な例文を生徒に提示することだとすれば、これは深刻な問題だと思います。

- He has been subscribing to the newspaper for five years. 「彼はその新聞を5年間ずっと購読し続けている」
- I found the magazine more interesting than I had expected. 「その雑誌は思ったよりもおもしろかった」
- The bridge is likely to be registered as a World Heritage site. 「その橋は世界遺産に登録されそうです」
- The ballerina came to Japan three years ago. 「そのバレリーナは3年前に来日した」
- What has happened to that singer? I haven't seen her on TV for a long time. 「その歌手に何が起こったのか？ 長い間、彼女をテレビで見ない」
- If I watch the movie again, I will have watched it three times. 「その映画をもう一度見たら、それを3回見たことになる」

これらの文が使われる場面が全く考えつかないとまでは申し上げませんが、実際の会話で使われることはめったにないでしょう。

実は、日本語は英語ほど「代名詞」に頼らないので、上記の例文を日本語に訳すと、英語のときより不自然ではないという主張はたぶん成り立つでしょう。しかしだからと言って、この主張が英語版の方の不自然さを減じることにはなりません。さらに言えば、英語教科書にそのような例が至る所にあることが、大方の日本人が英語で「代名詞」を適切に使うことが苦手な理由の1つなのかもしれません。

自然な「受動態」とは？

「文脈」はまた語順との関係でも、とりわけ重要な意味を持っています。「文脈」のために、特定の文法構造を他のものよりも優先的に使用することがあるのです。その顕著な例が「能動態」と「受動態」です。当然のことですが、教科書ではたいてい最初に「能動態」が示されています。そして、「能動態」から「受動態」に変換するための手順・方法に多くのスペースが割かれています。

ご存知の通り、「能動態」の文を「受動態」に転換（転換されたものが、全く同じ意味になるわけではありません！）するのは退屈なほどに簡単です。しかし、これには「危険」が伴います。1つには、「すべての動詞が受動態で使われるわけではない」ということがあります。さらに、「ありふれた動詞であっても、受動態ではごくまれにしか使われないもの」があるのです。

後者の1つが love 「愛する」です—おそらく日本で出版されている教科書の中で「態」の転換を示すために、最も広く使われている動詞だと言えるでしょう。この love は「受動態」ではめったに使われないと言っても信じられない方がいらっしゃるかもしれませんが、しかし、*Longman Grammar of Spoken and Written English* (1999) の 6.4.2.3 のセクションをご覧ください。そのコーパス調査結果では、他の like, hate, have, let, quit, reply, thank, try, want, watch のような当たり前の動詞と共に、love が受動態で使われるのは「2%以下」だということが示されています。ですから、もし動詞の love を含む英文（会話文、報道文、フィクション、学術的な英語を含む）を百個ほど無作為抽出したとしても、平均すれば2文だけが love を「受動態」で使っていることとなります。この事実から言えるのは、文法的に正しいかどうかに関わらず、動詞の love を「受動態」で使用した例文を載せている教科書は、どれもほぼ間違いなく学習者に不自然な例文を提供しているということです。

私がここで申し上げたいのは、教科書では単純な手順で「受動態」を作り、それを訳すことに紙面を割くよりも、どのような場合に「受動態」を使うのかということにもっと多くの紙面を割くべきだということです。そして、これは「文脈」を与えることによってしかできません。

このことを説明するために、以下のようなパラグラフを用意しました。まずはご一読ください。

Something terrible happened to Sally yesterday. A car ran her over while she was crossing the street. An ambulance rushed her to the hospital. The emergency room doctors gave her a blood transfusion, but they couldn't save her.

文法的な誤りはなく、一見すると完璧な文に見えます—たとえ Sally が誰かということを知らないとしても、必要となる「文脈」はすべて与えられています。しかし、「文体」としてはなっていません。この後に続く部分を読まないで、何がこの文をそんなにもおかしくしているのか、おわかりになるでしょうか？そして、それを適切な英語に書き直すことができるでしょうか？

私が「受動態」に関する説明をしてから、このパラグラフを載せたわけですから、きっと「受動態」を何か所かで使う必要があると思われたでしょう。しかし、それは今回のポイントではありません。上のパラグラフをとっても不自然なものにしているのは、それぞれの文が「新情報」で始まっているからなのです。英語が自然に流れるためには、文はなるべく既に知っていることから始めなければならず、「新情報」は終わりの方で出すべきです。

文法的には正しくても「文体」的には感心できない例として、ごく簡単なものを以下に挙げてみます。

John has a new girlfriend. Sally is her name. Chicago is where she lives. His ex-girlfriend is a little younger than her. 「ジョンには新しいガールフレンドがいます。サリーが彼女の名前です。シカゴが彼女の住んでいる場所です。彼の前のガールフレンドは、サリーより少し年下です」

これが「文体」としてよくない理由は、おのおのの文が「新情報」で始まっているからです。次のように書き換えれば、だいぶ望ましいものになることがおわかりになるかと思います。

John has a new girlfriend. She's called Sally,

and she lives in Chicagó. She's a little older than his ex-girlfriend. 「ジョンには、新しいガールフレンドがいます。彼女はサリーという愛称で、シカゴに住んでいます。彼女は、彼の前のガールフレンドよりも少し年上です」

さて、このように考えると、先ほどのサリーの事故についてのパラグラフも、次のようにすれば大幅に望ましい英語表現になることがおわかりになるでしょう。

Something terrible happened to Sally yesterday. She was run over (by a car) while crossing the street. She was rushed to the hospital (in an ambulance / by ambulance) and (was) given a blood transfusion (by the emergency room doctors), but she died.

この場合には、英語の自然な流れを作るために、「受動態」を使って文をつなげていく必要がありますでしたが、逆に「能動態」を使うことで文をつなげられる場合もよくあります—すべては文脈次第です。上の英文中のカッコで示した部分（自動車によって、など）は、もちろんたいいてい省略されます—例えば、彼女がフォークリフトにひかれたとあえて言わない限り、彼女の死の原因が「自動車」にあることは言わずもがなだからです。上記の例では明白で必要のない情報を含むことを避けるために、“short passive”（動作主を示さない受動態）を使う利点が学習者に示されているとも言えます。そして、この“short passive”を理解することで、学習者たちはより簡潔に書いたり、話したりすることができるようになります。

言うまでもなく、実際の英語では“short passive”は“long passive”（動作主を示す受動態）よりもはるかに多く使われます。ただ日本で出版されている英語教科書の「受動態」に関する項目を見ると、そのことがわかると思えません。

注）本稿における「英語教科書」は必ずしも「検定教科書」を表すものではありません。

(慶應義塾大学教授)